

令和6年度 校長だより 第4号

1 「微差」を重ねて、夢を実現

7月1日、3年生にとって就職のための「求人票」受付が開始される日を迎えました。求められる人材となるためには、日頃どれだけ自分を高めてきたかが肝心です。2年生は1年後に、1年生も2年後には同じ時を迎えます。希望する就職がかなえられるよう、また、進学予定者も自分の夢の実現に向けて、地道にコツコツと「微差」を積み重ね、「大差」をつけていきましょう。



2 「何よりも大切な「なぜ？」という問い

最近読んだ本に書かれていた内容の一部を紹介したいと思います。

私は、子どもの頃のような「なぜ？」という問いこそ、学校の勉強を面白く感じさせてくれる、ひいては人に考えることをさせ、人生を飽きさせないエネルギーの源だと思います。そして、その「なぜ？」は常識や、世間体や、権威にとらわれない素直な観察から生まれると思います。その“素直な観察”の基盤は「目に見えないもの」を“みる”感性なのです。この“みる”は「見る」のほかに「観る、視る、看る、診る」など、さまざまな“み”方があるのです。感性が豊かな幼時から小学校時代に感性を伸ばすことが決定的に重要なのです。困ったことに、「知識偏重」は誰もが持っている豊かな感性を委縮させてしまう元凶であり、「勉強」の面白さ、楽しさを奪う元凶でもあるのです。

子どもたちが発する素朴な「なぜ？」にくだらないものも、つまらないものも一切ありません。すべてが貴重な「なぜ？」です。周囲のおとなたち、とりわけ親御さんや学校の先生たちは、子どもたちが発する素朴な「なぜ？」に拍手を送ってください。そうすれば、子どもたちは自分が発する「なぜ？」の重要性を自覚し、勉強がどんどん面白くなるはずですよ。

私たち“おとな”にとっても、子どもの頃のような「なぜ？」という問いこそ、考えることをさせ、人生を飽きさせないエネルギーの源だと思います。

本書を閉じるにあたり、私が尊敬している江戸時代中期の自然哲学者・三浦梅園の大著『玄語』の冒頭の部分を引用したいと思います。

わたしは少年の頃から、触れるものすべてが疑問に思えた。説明してくれるひとのことばはうるさく耳に聞こえてきたが、わたしには寝言のようにわかりにくかった。思念は胸につかえ、分銅のない秤のように心の平衡がくずれた。ひとの説明によれば、火は陽であり、だから熱く、水は陰であり、だから冷たい。わたしはこう考えた。陽はどうして熱く、陰はどうして冷たいのか、と。(中略)(ひとは)天地についてはでたらめにとりとめもなく語り、死生についてはぼんやりとあいまいに述べる。かたよった証拠をあげ、根拠もなしにしゃべる。ひとは意に介しないが。わたしは気持ちがすっきりせず、くりかえし考え、探究にふけた。

(山田慶児編『日本の名著20 三浦梅園』中央公論社)

三浦梅園と比べるとはいささか畏れ多いことではありますが、私も少年の頃から現在に至るまで、次々に“不思議なこと”に襲われ、繰り返し考え、探究に耽る生活をしています。これは、死ぬまで変わりそうもありません。お陰で、私は人生に飽きることはないのです。

(志村史夫著『勉強ギライな子どもに「勉強の面白さ」を伝える方法 わが子の「21世紀型学力」を伸ばす!』から)

「『可能性の扉を開く鍵』がきっと見つかる」 ☆科学技術高校☆